

聖典の意味構造とその理解へ

宗教伝統における聖典の理解には、宗教言語テキストとしての聖典をその宗教的コスモロジーのコンテクストに位置づけて理解しようとする解釈学的態度が求められる。今回は、これまで取り上げた聖典の諸相をふまえ、聖典理解へ向けて求められる方法論的視座について叙述したい。

聖典理解への解釈学的視座

まず、イスラーム哲学者の井筒俊彦も指摘するように、イスラームの聖典クルアーンは「時間的にも空間的にも非常に違った『生活世界』の所産である」。この聖典が成立した7世紀のアラビア砂漠の人々と私たち日本人とは、生きる世界がかなり違う。私たちがクルアーンを読んで、その内容をそのまま理解することはほぼ不可能である。それは現象学者フッサールの言う「生活世界」(Lebenswelt)が違うからである。この聖典と私たちとのあいだには、空間的かつ時間的な疎隔が存在する。その疎隔を超えて、私たちはこの聖典を言語テキストとして読むことになる。同じことはヒンドゥー教のヴェーダ聖典やユダヤ教の律法(トーラー)などの聖典についても言える。私たちに自己の内的地平あるいは文化的枠組みの彼方へ、知の「地平」(Horizont)を拓いていくことが必要になるのだ。

特定の宗教文化における聖典は、教義と信仰の指針として権威をもつ宗教言語テキストである。それは日常の言語テキストとちがって、社会慣習的に固定化された日常の意味の世界を超えて、存在の深み、深層の意味の世界を開示している。概念的に理解しようとしても、そこには限界がある。聖典の言葉に込められた意味の深みを、自己の内的地平において、日常言語の表層的な意味次元で理解しようとする限り、聖典理解の地平は拓けてこない。空間的かつ時間的な疎隔がある聖典の言葉を理解するには、宗教伝統のコンテクストに位置づけて、その言葉を共感的に読み解くという解釈学的な態度が不可欠である。そこには、ガダマーが言う「地平融合」(Horizontverschmelzung)が次第に現成していく。聖典の言葉に込められた意味の深み

聖典の言葉は日常言語の意味次元を超えて、生の深層の意味を説いている。その点に聖典の言葉がもつ特質がある。つまり、言葉の日常的・表層的な意味次元とともに、言葉の深層的な意味次元を、いわば二重写しに把握できるようになってはじめて、聖典理解の地平が拓けてくると言わなければならない。

私たちが日々の生活のなかで使っている言語記号(シーニュ)は、ソシュール言語学によれば、シニフィアンとシニフィエ、すなわち「意味するもの」(音声表象)と「意味されるもの」(意味表象)という二つの側面から成っている。これら二つの側面は、日常言語では一枚の硬貨の表裏のように密接不可分である。聖典の言葉は、たとえ日常言語のそれと同じであっても、シニフィアンとシニフィエのあいだに意味のずれがある。それはシニフィアンとシニフィエの関係がずれて、シニフィエのほうが広がり深まって、多義的であるからだ。そのことは聖典の言葉が説く深層の意味の世界を、日常言語の表層の意味の次元で概念的に理解しようとしても、そうした概念的理解には限界があることを暗示している。宗教学の古典的名著『聖なるもの』の著者ルードルフ・オットーも言うように、聖なるものの本質すなわち「ヌミノゼ」(das Numinöse)は、ただ心情によって把握できるだけである。聖典の言葉が説く意味世界は、日常的な意味世界とちがって、合理的あるいは概念的な理解を超えている。

エクリチュールおよびパロールとしての聖典

今日までの聖典研究は、おもにエクリチュール(書き言葉)としての聖典を研究対象とするものであった。研究の対象とされてきたのは『聖書』のような書物、エクリチュールとしての聖典であった。パロール(話し言葉)としての聖典はほとんど研究対象とさ

れなかった。「書かれた聖典」だけが注目されて、「語られる聖典」の重要性は、聖典研究の視座から落ちこぼれてきた。

たとえば、江戸時代の手習塾(寺子屋)において、子どもたちは儒学テキストの四書五経を「素読」をとおして、内容を理解できなくても、声を出して繰り返し読み、そのまま暗誦した。「書かれた聖典」は素読をとおして心に記憶され、人々にとって「語られる聖典」となった。「書かれた聖典」が「語られる聖典」になることは、テキストの暗誦によって得た知識が心の深みへと次第に滲み込んでいくことを意味する。このように〈身体化〉された儒学の知とその意味の深みは、日々の生活の中で、時間が経つにしたがって、次第に実感として理解されていった。同様のことは、インドのシャンカラ派僧院において、プラフマチャーリン(学生)たちがヴェーダ聖典やウパニシャッド聖典を師から習得する暗誦についても言える。インドでは、聖典が師から弟子へと伝承される手段が、パロールによる口頭伝承であった。世代を超えて口頭伝承されたヴェーダ聖典は、エクリチュールによる聖典の伝承と比較すると、その精確さにおいて、ほとんど違いがない。暗誦による聖典の伝承は、イスラームやユダヤ教などの世界の諸宗教伝統にも見いだされる。

原典の言葉とその特質

これまでの議論をふまえたうえで、天理教の原典がもつ特徴を捉えかえすと、その特質がいつそう明らかになる。まず、エクリチュール(書き言葉)とパロール(話し言葉)という視点から捉えると、三原典のなかで、「おふでさき」も「みかぐらうた」も教祖によって書き記されたエクリチュールとしての啓示の言葉である。「おさしづ」はパロールとしての啓示の言葉がエクリチュール化された聖典である。とりわけ、「みかぐらうた」は祭儀(「つとめ」)の地歌、祈りの言葉である。それが「つとめ」において、手振りと鳴物を伴って唱えられることは、天理教独自の特質である。「みかぐらうた」は冊子として手に取って読むこともできるが、数え歌形式であって覚えやすい。この道の信者はそのおうたを心に覚え込んでおり、いつでもどこでも口で唱えることができる。つまり、パロールで繰り返し反復し、常に原典(3)の言葉に込められた意味、親神の思いを感じとることができるのだ。

さらに、言葉の意味の重層性という視点からみれば、原典の言葉は、日常的な意味次元から深層的なそれに至るまで、多元・多層的な意味構造を成している。原典の言葉には、日常的な意味に、いわば「意味の重ね書き」がなされている。とりわけ、日々の信仰の心得を教示する「みかぐらうた」は、ただ「書かれた聖典」であるばかりでなく、パロール次元で唱えられる、まさに「語られる聖典」でもあると言えるだろう。

この連載エッセイにおいて、私は含蓄深い聖典の意味構造を、このような簡単な議論で尽くそうとするのではない。ただ、ここでは聖典の理解へ向けて、従来の研究成果をふまえ、エクリチュールとパロールという視点とともに、言葉の意味の重層性という視点からも、聖典の言葉を複眼的に捉えていく方法論的射程が不可欠であることを指摘したかったのだ。このことを記して、連載エッセイの筆を擱きたい。

〔註〕

- (1) 井筒俊彦「コーランを読む」、『イスラーム文化』(井筒俊彦全集・第七巻)、慶應義塾大学出版会、2014年、272～273頁。
- (2) Rudolf Otto, *Das Heilige* (1917; München: C.H. Beck, 1963; 2014), S. 13. ルードルフ・オットー(華園聰磨訳)『聖なるもの』創元社、2005年、27頁。また、拙著『ルードルフ・オットー——宗教学の原点』慶應義塾大学出版会、2019年、95～120頁を参照。
- (3) 拙著『天理教人間学の地平』、天理大学出版部、2007年、49～87頁。